

植物の力

一二三朋子

植物の旺盛なる繁殖力に驚かされること、しばしばなり。家を壊せし後の更地、數週間も経たざるうちに、雑草に覆はるるは、しばしば目にする光景ならむ。數年前、我が住まひの前なる桂川の護岸工事によりて、河原に繁茂せし灌木・野草・蔓草の類、廣範圍にわたり、伐採せらるることありき。なれど、ふと氣の付けば、野草及び蔓草の亂れ生ひ茂れる原っぱとなりてをり。誰も種を蒔かざりしこと、言ふまでもなし。

地球上の生物量（バイオマス）の九九・五％以上は植物なり。動物は僅かに〇・五％以下なり。植物なむ動物を凌駕する生命力を持つと言はざるを得ず。

自らの力にては移動し得ず、知能も感覚もなく、動物・昆蟲などに食はるとも無抵抗にて、「生物ピラミッド」の最下位なる生き物なりといふが、ルネサンス期以前よりの植物に對する見方ならむ。

なれど、植物は無能に非ず。環境に適應しうる能力を有すればこそ、五億年もの長きにわたり生き延び、獨自の進化を遂げて地球上に繁茂するなれ。

その生命力の「所以の一は、腦、心臓、肺などの重要な生命機能を一箇所に集中せざることにあり。なれば、一部を動物に捕食せらるるとも、また、折らるる、あるいは切らるることあらむとも、致命傷となることなく、再生可能なり。

次に、植物は、人間の五感に相當する感覚を有するなり。

植物は光に向かひて葉を伸ばし、光を避くる方向に根を伸ばす。即ち、光を受容する視覚を有するなり。また、自ら匂ひを發しつつ、揮發性物質を捉ふる受容體により周圍より情報を得ることも可なり。こは嗅覺に相當す。さらに、味覺をも有す。地中に存する栄養素を含む化學物質を求め、取り込む受容體、言ひ換ふれば、味覺を有す。觸覺も言はずもがな。含羞草（オジギサウ）なむ、觸れられなば葉を閉づるなり。蔓の木に巻き付くも、觸覺を有すればこそそのゆゑなり。また、振動を捉ふること可なるは聽覺を有するが如し。音樂を聞かせて作りし酒なむ、美味しといふ。東北に、家庭菜園を趣味とする知人ありき。その知人の作りし野菜はいずれも市販のその二倍ないし三倍も大きく、大根程の大きさの薩摩芋を頂きしこともありき。その知人曰く、野菜を大きく作る祕訣なむ、毎晩畑の周りを歩くことなる。作物は足音を聞いてありとの由なり。

また、植物は揮發性化學物質を放出し、近隣の植物に危険を傳へ、防御態勢をとらするなり。仲間との情報共有能力をも有すといふべきか。

さらには、植物なむ、したたかなる策略家なる。自らは移動せずとも、風はおろか、蟲・動物杯などを利用し、花粉や種を運ばするなり。

植物は、動物の存在せずとも、生きることを得。なれど、動物は、植物なくしては生きられず。食物、酸素、燃料、醫藥品等、植物に由來せざるものなし。たとへ人類悉皆滅びなむとも、植物は減ぶることなく、むしろいつそう勢力を増して地球を覆ひ盡さむ。

二〇〇八年、スイスの生命倫理委員會にて「植物の尊嚴」、満場一致にて合意せらるるといふ。我が國には古より樹木に神聖性を認むる「御神木」、各神社などにあり。科學的方法によりて植物の様々な能力を検證して漸く「尊嚴」を認むるなむ、遲きに失せし感のなくもあらぬ。なれど、「人間こそ最も優れて進化せるもの」といふ傲慢さ・人間至上主義の矯めらるる端緒とならば、喜ばしきことといふべきならむ。

【参考文献】『植物は〈知性をもっている〉』（NHK出版 ステファノ・マンクーズ、アレックス・サンドラ・ヴィオラ）

（令和八年三月二十四日受附）